

English Immersion Camp 2001 Report

*Don't be afraid of making mistakes.
Let's try communicating in English.*



21世紀を担う日本の子どもたちに、
コミュニケーション・ツールとしての英語力を!

公立教育研究会
Immersion Camp 事務局

この報告書の目的は、「第一回 English Immersion Camp の『成果』についてより多くの方々に正しくお伝えする」ということです。

「成果」とは、当初の目的を想像以上に素晴らしい形で達成できたことであり、子どもたちが、12日間で見せた、変化・成長、そして、学び、考え、行動したことすべてです。

そして、この成果をもたらした一番の要因は、「一人ひとりの子どもたちの成長」を真剣に願い、日々の変化・成長に気づき、認め、ほめ、元気づけた「人」の存在に他なりませんでした。

この報告書を通じて、グローバル化が進む中、「日本の子どもたちには世界とコミュニケーションできる十分な英語力が必要であるということ」また、「その力を身につけることは十分に可能であるということ」をお伝えしたい。そして、多くの日本人がもつ「英語はできるようにならない」という先入観を払拭し、日本の英語教育をかえていくきっかけになればと願います。

12日間のキャンプの様子を収録したVIDEOがあります。

報告書とあわせて、ぜひご覧下さい。

CONTENTS

CONTENTS	1
はじめに	3
1. 概要.....	5
ENGLISH IMMERSION CAMP とは.....	5
開催主旨・目的.....	5
成果の概略.....	5
実施概要.....	6
2. 経過.....	7
ENGLISH IMMERSION CAMP タスクチーム	7
キャンプ・リーダーの募集～研修.....	7
参加者の募集	9
3. 内容.....	11
全体プログラム.....	11
全体の流れ（コンセプト）	11
一日の流れ（APU滞在期間中）	12
グループ制.....	13
英語を使いやすくするためのしかけ.....	13
英語での日記	14
ENGLISH IMMERSION CAMP NEWS(E-MAIL)の配信・ITの活用.....	14
キャンプ・リーダー&スタッフ ミーティング	15
4. 12日間の子どもの変化・成長、ドキュメント.....	17
5. コメント集.....	29
子どもたちの感想	29
保護者の感想	32
キャンプ・リーダー、スタッフの感想.....	34
6. アンケートの結果から.....	37
7. 考察.....	39
成功要因について	39
「沈黙期間」を乗り越えて…日本の子どもたちはやればできる！.....	40
おわりに	43
参考	45
参加者の内訳	45
キャンプ・リーダーの内訳	45
アンケートの集計結果.....	46
APU 立命館アジア太平洋大学について.....	46
メディアによる取材	47
英語基本指導マニュアル（日本語版）	49

CONTENTS

CONTENTS

PREFACE

1. INTRODUCTION

2. THE PROBLEM

3. THE THEORY

4. THE EXPERIMENT

5. THE RESULTS

6. THE DISCUSSION

7. THE CONCLUSION

8. REFERENCES

9. APPENDIX

10. INDEX

はじめに

～今、皆が、地球規模で考えなければいけない時～

21世紀…子どもたちは大変な時代を生きていこうとしています。世界はますます激動し、子どもたちの「何が正しいの？どうすればいいの？」という疑問に、大人たちもどのように返事をしてよいか迷ってしまうほどの変化とスピードではないでしょうか。子どもたちは、そのような世界を生きていく力として、何を身につければよいのでしょうか。

IT、科学技術等の進歩は、我々の生活を大きく変えました。テレビやインターネットの情報、服の製造先、食物輸入元、海外への渡航…著しく「国際化」が進んでいます。しかし、映像で見たり手に触れたりする「世界」が急速に近くなっているほど、人類の心の距離が近づいているとは言えないのではないのでしょうか。まだまだ、人口、食料、環境など地球規模の問題も山積みです。今こそ、世界中の人々が手と心をつなぎ、共に考えなければならぬ時なのです。

～子どもたち、人の幸せを願う…志を同じくする人が集まれば、すごいことが起こせる！～

明るい未来を創るためには、どうすればいいのでしょうか。それは、何が、なぜ問題なのか、当事者となって、人の想いを聞き、自分の意見が言える。つまり、「コミュニケーションし、考え、行動できる『人』が育つこと」が最重要にして最高の答えになってきます。その手段として、「日本人が世界の共通言語である英語を使えるようになること」は緊急の課題なのではないでしょうか。

同じ考えを持ち「国際社会、人、教育、日本」のことを日々真剣に考え提言を行っておられる朝日新聞コラムニストの船橋洋一氏が、ある日、公文教育研究会との話し合いの中で、いてもたってもいられずに「公文さん、このままでは日本の教育が、教育全体がダメになる！一緒にやりましょう！」との呼びかけをされました。公文は「私たちの夢である“世界平和”にここからも大きく貢献できる！ちょうど私たちも同じことを考えていました！」とがっちり握手を交わしました。こうして初めての English Immersion Camp が誕生したのです。

立命館アジア太平洋大学（APU）学長の坂本和一氏、同大学職員の方々や学生、大分県知事の平松守彦氏、上智大学教授の吉田研作氏と学生へとその輪は広がり、国際ジャーナリストの木下玲子氏も「是非、一緒にやりましょう！」と『世界と触れ合う。世界共通コミュニケーション・ツール（英語）が何のために必要かを体感・実感するキャンプ』は実現に向けて大きく動き始めました。

現在の「混沌とする世界」を救うのは“人”です。今回のキャンプ・リーダー（APU留学生）の活躍からもそれを確信しました。子どもたちの「なぜ英語を使えるようにならなくちゃいけないの？」の答えは、子どもたちが「なぜ英語を使いたくなかったか」という気持ちの中に見つけることができるでしょう。一人ひとり子どもたちの英語が話せた！通じた！の喜びと感動は、子どもたちの将来にどのようにつながるでしょう。是非この冊子（ビデオ）全編をご覧ください。みなさんの「コミュニケーションの始まり」となれば幸いです。

1. 概要

English Immersion Camp とは

Immersion とは「どっぷり浸す」という意味で、朝起きてから夜寝るまで、使える言語は英語だけ。英語「を」教えるキャンプではなく、これまでに身につけてきた英語をいろいろなアクティビティーや、実際の生活の中で使いながら、英語でのコミュニケーションに挑戦する、英語「で」のキャンプである。

開催主旨・目的

第一回目の English Immersion Camp は、「グローバルゼーションの中、子どもたちに十分な英語力を身につけてもらいたい。地球社会に貢献できる人材の育成を通じて世界平和に貢献したい」という共通の夢・志を持つ人たちによって共同で企画・開催された。

このキャンプの目的・成果イメージは以下の3点

- 子どもたちが、いろいろな文化をもつ人たちとの交流を通じて驚き・感動を得る
(その人の志や国や地域、文化、考え方を知り、世界の中の自分を感じる)
- 子どもたちが、英語を使ったコミュニケーションの成功体験を持つ
- 子どもたちが、世界への広い視野を持ち、自信・自己肯定感・意欲・やる気を持つ

さらに、上記の成果を多くの方に伝えることによって、

- 「日本人は母国語以外できない」という先入観を払拭し、日本の子どもたち、そして大人たちにも、リテラシーとしての英語力を身につけることは可能であるという自信や勇気を与えること
- 日本の英語教育を変えていくきっかけを作ること
を目指した。

成果の概略

上記の「目的・成果」については十分に達成されたと考える。

成功要因は以下の2点

- 1 参加者が日頃の学習によって基礎的な英語力を身につけており、「英語でコミュニケーションできるようになりたい」という強い意欲を持っていたこと
- 2 このキャンプの目的を共有し、一人ひとりの子どもの変化や成長を徹底的に認めて、ほめて、元気づけたキャンプ・リーダーやスタッフたちの存在

実施概要

対象：日頃から英語を意欲的に学習している小4～小6生、30名（英検4級程度が目安）

日程：2001年8月17日(金)～8月28日(火) 12日間

場所：立命館アジア太平洋大学A P U（大分県別府市）
つるみ荘（別府市） 湯布院青年の家(湯布院町)

費用：96,000円（現地までの交通費を除く）

スタッフ：キャンプ・リーダー：17カ国、22名のA P U留学生

その他：A P U学生、上智大学生、公文教育研究会社員

主催：公文教育研究会

企画協力：立命館アジア太平洋大学(A P U)、A P U/Entrepreneurs(学生サークル)、

上智大学/S T P(学生サークル)

船橋洋一氏（朝日新聞コラムニスト）、平松守彦氏（大分県知事）、坂本和一氏（A P U学長）、吉田研作氏（上智大学教授）、木下玲子氏（国際ジャーナリスト）

（順不同・敬称略）



2. 経過

English Immersion Camp タスクチーム

開催決定直後の 2001 年 2 月下旬、公文教育研究会のスタッフを中心としたタスクチームを結成。途中、APU ネットワークオフィスの川口課長、APU/Entrepreneurs、上智大学/STP、国際ジャーナリスト木下玲子氏（のちに今回の名誉校長となる）も会合に参加。

「今なぜ、何のために English Immersion Camp を開催するのか」今後の全活動の大本となる価値観の共有に多くの時間を費やししながら、この活動が主催者となる公文教育研究会にとっても一企業の枠を越えたものであることを確認した。

「目的・成果イメージ」を決めるために議論を重ねた後、木下氏の「世界にはいろんな英語がある。一つじゃない。少しくらい間違っていたって平気。それでも通じるということ。失敗から学ぶ楽しさ、失敗する贅沢を経験させてあげましょう。みんなで楽しみましょう」とのアドバイスによって大きく前進した。

このコンセプトは後に、

Don't be afraid of making mistakes. Let's try communicating in English.

というこの Camp のスローガンへとつながった。

キャンプ・リーダーの募集～研修

キャンプ・リーダー募集説明会の準備

何よりも「子どもたちに直接接するキャンプ・リーダーこそが、成否の鍵であり、最も重要なキーパーソンになる」と考え、当初からキャンプ・リーダーは、APU の留学生に依頼する方針であった。それは、「彼らは、年齢的に子どもに近い学生である」しかも、「50 を越える国や地域から意欲的で志の高い学生が多数集まってきている」等の条件が揃っていたからである。

しかし、English Immersion Camp の意義・目的を正しく理解、共感でき、子ども好きな人を第一条件とするためには、説明会と面接で直接会って話すことが不可欠だと考えた。さらに、その後の研修への参加を必須条件とした。

募集説明会の案内は、APU、および Entrepreneurs の全面的な協力を得て、ポスターや資料を学内随所に設置、Entrepreneurs のホームページを経由しての情報提供などできる限りの手を尽くした。

募集説明会・面接

説明会は、木下玲子氏による特別講演会とあわせて開催された。

5/17(木)の説明会には、約 130 名が参加し、その内の 104 名の学生が、翌日から 3 日間にわたって行われた面接に参加した。面接は、6 名の公文教育研究会のスタッフが直接行った。

応募者の多くは英語を母国語とはしていなかったが、世界共通語としての英語を自ら獲得し、使いこなしている人たちばかりであった。「子どもたちに英語の楽しさを教えたい。人材育成に貢献したい」という彼らの志の高さに面接にあたったスタッフも驚きを隠せなかった。

そして、17カ国 22名のキャンプ・リーダーが決まった。

研修

価値観の共有とチームとしての結束を固めるために、キャンプ・リーダーとスタッフで3回の合宿、ミーティングが実施された。実際のキャンプ開催地を会場に、指導の基本の確認、プログラムの演習や意見交換を行なった。



合宿①

日時：6/9(土)～10(日)

場所：湯布院青年の家

テーマ：価値観の共有、指導の基本の確認、
チームとしての一体感の醸成

公文式教室見学

日時：7/6(金)

場所：公文式 別府緑ヶ丘教室（定元待子先生）

テーマ：個人別・能力別・自学自習という公文式の学習システム、現場に触れ、キャンプでの基本指導、対応に生かすこと

合同ミーティング

日時：7/7(土)

場所：APU

テーマ：アクティビティーの内容を確認し、それぞれの役割、担当を決めること

合宿②

日時：8/1(水)～2(木)

場所：つるみ荘～APU

テーマ：プログラム等の最終確認

子どもたちを対象にした、アクティビティーの実践トレーニング

※8/2は、1日プログラム／Mini Immersion Camp を実施

募集要項の基準を満たす大分県内の公文生 30 名に協力を依頼した。

1日という短時間でも、子どもたちと楽しく過ごすことは出来た。しかし、「英語で」のコミュニケーションを促すことの難しさを改めて痛感した。「日本語を使うことも必要ではないか」との意見も出る中、English Immersion Camp の目的と基本事項を見直し「英語のみ」にこだわることを再度、確認した。

参加者の募集

募集エリア

実施日程が、8月下旬ということ考慮し、西日本に限定して募集を行った。

募集方法

西日本地域の公文式教室を通じて、対象学年の生徒にパンフレットを配布（6/月上旬配布開始）

大分合同新聞：6/10(日)、13(水)、西日本新聞：6/16(土)に募集広告を出稿。

応募状況

約3週間の募集期間に、259名が応募

申込用紙（エントリーシート）には、「自分の英語の力を試してみたい」「世界の人たちと英語でコミュニケーションしてみたい」「将来の夢をかなえるためにぜひ参加させて欲しい」「私を選んで！」という子どもたちからの積極的なメッセージとともに、「英語を学習しているが、実際に使う場がない。その経験をさせてあげたい」という保護者からのメッセージが溢れるほどに書き綴られていた。ここからも彼らの意欲・欲求の高さを伺い知ることができた。

参加者の確定

応募者の中から、抽選で30名（4年生8名、5年生8名、6年生14名）を決定した。

一般からの応募もあったが、抽選の結果、今回は30名全員が公文の英語学習者となった。

今回のイマージョン・キャンプへの意気込み、やる気等を自由にご記入下さい(必ずご本人が記入して下さい)

ぼくは、ホー4ステイなどは一度もしたことがありません。でも、English Immersion Campのことを知って、「これだ!!!」と決めました。英語をも学べる、友達もできる、楽しめるという三鳥たい...
チワワの英語だけじゃなく、やるきまん、かまかり度200%でがんばる、ていきたいなあと思います!!!

I like study English!

今回のイマージョン・キャンプへの意気込み、やる気等を自由にご記入下さい(必ずご本人が記入して下さい)

たった一人で家族とはなれての旅行は、ほとんどしたことありません。しかも12日間英語だけなので、なかなかしゃべれないかもしれません。ほかの国の人達と話をしたこと、少しありません。でも自分でやれるだけしゃべってみて、自分かどれだけ英語をしゃべれるのか、ためしてみるためにもぜひ行ってみたいです。いろいろな国の人と交流して、キャンプをしたり、いっしょに生活をしながら、会話をしてみたいです。通訳になりたい夢があるので、実現の第一歩としてぜひ参加して、いろいろなことを経験してみたいです。

3. 内容

全体プログラム

	午前のアクティビティ	午後のアクティビティ	テーマ
Day 1 8/17(金)	集合 オリエンテーション	室内ゲーム	緊張をほぐし、心を開く
Day 2 8/18(土)	アウトドアゲーム(別府公園)	グループ旗作成	
Day 3 8/19(日)	A P Uへ移動	A P U入校式 学内探検ツアー	お互いを知り、理解を深める
Day 4 8/20(月)	パソコンで新聞をつくる	ペーパークラフト (It's A Small World)	
Day 5 8/21(火)	スポーツ	地獄めぐり 温泉へ行こう	
Day 6 8/22(水)	自由時間	竹を使って楽器作り	
Day 7 8/23(木)	キャンプ・ファイヤーのための 衣装づくり	キャンプ・ファイヤーでのパフ オーマンズの練習	
Day 8 8/24(金)	湯布院へ移動	カレー作り(コンテスト) キャンプ・ファイヤー	野外活動を通じて協力、協調。
Day 9 8/25(土)	オリエンテーリング	ビッグ・バルーンを上げよう	
Day10 8/26(日)	自由時間	オリジナルTシャツ作り	世界の中での 自分を感じる。
Day11 8/27(月)	まとめ発表の準備・練習	ゲストのお話/まとめ発表 パーティー	
Day12 8/28(火)	卒業式		

全体の流れ (コンセプト)

- 最初の2日間は緊張をほぐすために自己紹介ゲームや野外でのゲームなどを中心に構成した。
- 生活に変化をつけるために、外出(地獄めぐり、温泉)や湯布院への一泊キャンプなどを盛り込んだ。
- 共同作業を通じて、自然にコミュニケーションを促進できるよう、また、それぞれの個性や文化を表現しやすいように衣装作りや楽器作りなどの創作活動をふんだんに取り入れた。
- ある目標に向けて個人や各チームで取り組み、その成果を英語で発表する場を設定した。
(キャンプ・ファイヤーでのプレゼンテーションやまとめ発表など)

一日の流れ（A P U滞在期間中）

時間	項目
06:00-	起床
07:00-	学習タイム※1 Today's Key Phrases
08:00-	朝の体操 朝食
09:30-	午前のアクティビティー
12:30-	昼食
14:00-	午後のアクティビティー
17:00-	入浴・シャワー
18:00-	夕食
19:00-	生徒のミーティング※2
20:00-	宿舎へ移動・自由時間 キャンプ・リーダー&スタッフミーティング※3
21:30-	就寝

学習タイム



朝の体操



※1 学習タイム：学習習慣を保つために、毎朝、1時間程の学習タイムを設定した。子どもたちは各自持参した課題を、キャンプ・リーダー（希望者 17 名）は公文式の日本語教材を学習した。

※2 生徒のミーティング：翌日の行動予定を確認し、各自日記を書いた。

※3 キャンプ・リーダー&スタッフミーティング：子どもたちを宿舎に帰した後、毎晩キャンプ・リーダーとスタッフのミーティングを実施した。情報交換の重要な時間であり、今回のキャンプの成功要因の一つとなった。[詳細は後述]

グループ制

英語でのコミュニケーションを促進し、お互いを深く知り合うためにもメンバーを固定するグループ制が有効であると考えた。

初日は、全員が知り合うために、あえてグループを分けなかったが、2日目からは、グループでの行動を基本とし、各グループ子ども5人（男女、学年混合）とキャンプ・リーダー3、4人の6グループを編成。最終日まで同じグループで行動した。

キャンプ・リーダーはグループの子どもたちの様子を正確に把握でき、お互いの情報共有も促進された。また、子どもにとっても自分のグループのリーダーがはっきりしていることで安心感があり、仲間意識も育った。

ただし、食事の時間や自由時間、いくつかのアクティビティーにおいては、グループを越えた交流ができるように配慮した。30人という比較的少人数であったため、子ども同士はもちろんのこと、全てのキャンプ・リーダーがグループを越えて、全ての子どもと積極的な関わりを持ち、一人ひとりの様子も把握できた。

英語を使いやすくするためのしかけ

Today's Key Phrases を毎朝提示し、意識的にその表現を使うようにした。また、それぞれのアクティビティーの前に Key Word、Key Phrase を提示して、英語の説明理解を促した。

歌を多く取り入れた。夜のミーティングはもちろん、アクティビティーの合間や移動時間などでも良く歌った。



Key Word、Key Phrase は、イラストと活字によるスケッチブックサイズのカードを使い、キャンプ・リーダーがジェスチャーなどを交えながら説明を行なった。キャンプ後半には、その説明に子どもたち自身が参加するようにもなった。

英語での日記

子どもたちは毎日、その日のできごとや感想を英語で日記に書き、キャンプ・リーダーがそれに対して一言のコメントを添えて返すということを続けた。

この日記は、単に思い出の記録ではなく、子どもたちの日々の変化・成長をシッカリと認め、ほめ、元気づけるための貴重な資料でもあった。しかもそれが形で残る。お互いにとって大切なコミュニケーション・ツールの一つだった。

また、5日目からは、その日のミーティングの中で子どもたちが自分の日記を読むようにした。これは、子どもたちに「英語で気持ちを表現することができているよ」「シッカリ伝わるよ」「君たちはやればできるんだよ」ということをしっかり認めて、伝えたい、それによって彼らの自信を深めたいという考えから、当初の予定を変更して行なわれた。日を迫うごとに、「僕に、私に読ませて!」という声が増えていった。

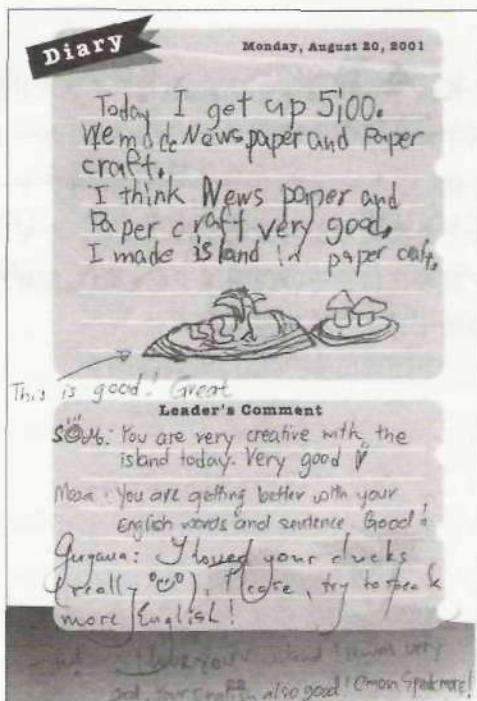
English Immersion Camp News(e-mail)の配信・ITの活用

各グループごとに、デジタルカメラを配布し、思い思いの写真をとった。毎日その中から選んだベスト・ショットにコメントをつけて English Immersion Camp News に掲載した。

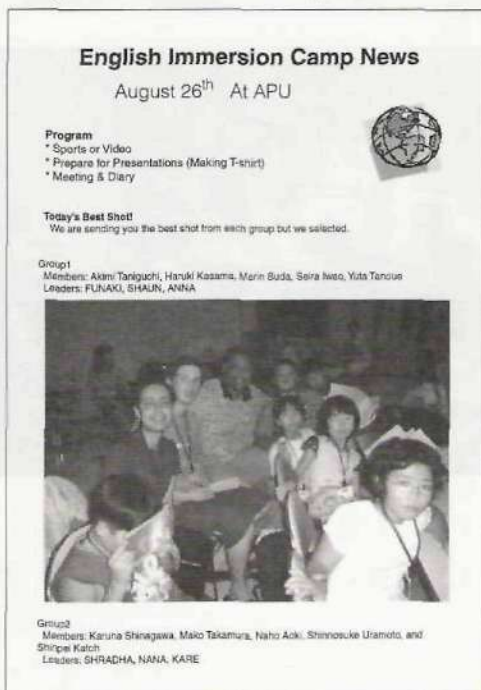
English Immersion Camp News は、予め登録された家族や知人、関係者にほぼ2日ごとに配信された。「子どもたちの変化の様子が良くわかる」と好評だった。

また、10日目にはこの写真データを活用して、一人ひとりのオリジナルTシャツを作った。

日記



English Immersion Camp News



キャンプ・リーダー&スタッフ ミーティング

毎晩アクティビティーの終了後、キャンプ・リーダーとスタッフによる全体ミーティングを実施した。一人ひとりの子どもの様子について真剣に語り、グループを越えて Good・Bad 情報や気づきの共有を図った。初めての English Immersion Camp は毎日が悩みの連続、まさに手探りであったが、このミーティングがこのキャンプ最大の成功要因の一つであったことは間違いない。

共に悩み、苦しんで、熱のこもったミーティングは2時間に及ぶこともしばしばだったが、子どもたちの変化・成長を感じ、共に喜びで涙する日も少なくなかった。

「失敗を恐れてなかなか、英語を話そうとしない子どもたちに、どうすれば発語を促すことができるだろうか?」「もっと楽にコミュニケーションとれると思っていたのに…」と子どもたちが失いかけている自信を取り戻させるためにはどうすれば良いだろうか?」「かたくなに英語を拒否する生徒への対応は?」など、毎日が悩みの連続であった。キャンプ・リーダーたちも子どもたちとの英語コミュニケーションがここまで難しいとは思っていなかった。



しかし、「子どもたちのために…」ミーティングは常にこの一点に向かって行われた。「子どもたちになんとか成功体験を持たせたい」この一心で知恵を絞り、必死で子どもたちに働きかけを続けた。グループを越えて助け合い、励まし合った。そして、真剣な話し合いを続ける中で、キャンプ・リーダーたちもスタッフも素晴らしい進化・成長を遂げていった。

「一人ひとりを大切にして、変化と成長を認めていこう、できることをもっと誉めよう」「あんなに英語を嫌がっていた子が、自分の興味のあることなら生き生きと自分から英語で説明してくれたよ」「話すのは苦手かもしれないけど、話は十分に聞いているよ。読んだり、書いたりするのは得意だから、毎日の日記をみんなの前で読んでもらうようにしたら」…状況に応じて柔軟に対応し、必要に応じてプログラムを変更することも自然に行われるようになった。

そうしたキャンプ・リーダーたちの真剣な取り組みや行動は子どもたちに確実に伝わった。子どもたちは「この、自分のことを一生懸命に考え、愛してくれるキャンプ・リーダーともっと分かり合いたい」この気持ちが原動力となってコミュニケーションが活発化し、英語を使うことへの恥ずかしさや抵抗も徐々に薄れていった。

キャンプ・リーダーたちは、それぞれに思っていること感じていることを遠慮なくストレートに表現し、ぶつけ合う中でより良い解決策を導き出していった。これこそが「コミュニケーション」ではないだろうか。日本人スタッフもこうした彼らの姿から多くを学ぶことができた。

4. 12 日間の子どもの変化・成長ドキュメント

Day 1 8/17

期待と緊張、そして不安の中で12日間の英語だけのキャンプが始まった



Welcome! パスポートをもらう姿も硬いね



Do you understand ?

英語での説明を聞くのに必死!

その表情には不安が・・・



キャンプ・リーダーと最初の記念写真
でも、やっぱり表情が硬いね

Day 2 8/18

公園へ行こう！ 今日からグループで行動だ！ みんな友だち 少しずつ心を開いて・・・



キャンプ・リーダーの笑顔についていだけで精一杯です
(別府公園へお出かけ ゲームでメンバーの自己紹介)



グループのみんなで作った旗の前で！
これから、うまくやっていけるかなって気持ち



We are "Group 5" 輪になって、ハイ、チーズ

Day 3 8/19

いよいよAPUへ キャンプもセカンドステージへ！



APU入校式で歌った、It's A Small World!
練習の成果は？



Found it!
ゲームの答えをみんなで見つけたぞ
ハイ、チーズ！



I like this one! (e-mail で配信する今日のベスト・ショットを選びます)

Day 4 8/20

緊張感が薄らぐ中、今まで見えなかったものが見えてきた 周りが気になったり、沈黙期間に入ってしまう子も・・・



英語の説明も落ち着いて聞けるようになってきたぞ



やった！
English Immersion Camp News のできあがり！



ペーパークラフトのテーマは It's A Small World でも、まだキャンプ・リーダーについていってると感じ

Diary

Monday, August 20, 2001

Today, paper crafts,
I made Moon, faces, and stars.
Moon and stars are very beautiful.
Making Wall newspaper is difficult.
Study time was very tired.
Making Wall newspaper was very
interesting, and enjoyed. Today was
very very very tired and enjoy
and interesting, English is very
difficult.

Leader's Comment

Well Done !!
You have made many beautiful
objects for our wall newspaper.
Maybe you should sleep
before 11pm tonight ok?

HELEN

4. 12日間の子どもの変化・成長ドキュメント

Day 5 8/21

スポーツ大会！ お互いの距離が近づいた でも、一方では、わがママが出て、ケンカが始まったり・・・



広い体育館でスポーツ大会 ストレス発散！
「イヤだ 風船割らないで！」

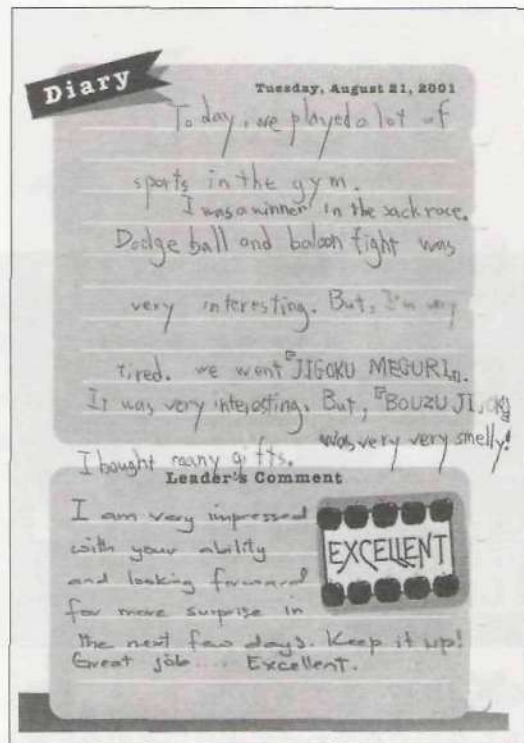


地獄めぐりでのワンシーン 待ち時間に英語の歌のパフォーマンス 他の観光客は「何が始まったの？」とビックリ



The evening meeting.

自信を持って英語を話そう！
この日から日記の発表が始まった



Day 6 8/22

Free Time は自分のしたいことを自分で選んで楽しんだ！
楽器づくりも、みんなで協力して助け合う



Riding high!

さあ、Free Time どこに行こうか



僕はバドミントン！ What form!



シッカリ持ってて！

みんなで力を合わせて面白い楽器を作ろう

Diary

Wednesday, August 22, 2001

Today we played the baseball
and basketball and badminton.
I like baseball.
It's very fun.
We made musical instrument.
I made flute.
Today is very fun day.

Leader's Comment

Shota! I'm glad you had a
good day! I like baseball too!
Let's play baseball together
oneday! Okay? CA chan -

4. 12日間の子どもの変化・成長ドキュメント

Day 7 8/23

キャンプ・ファイヤー(パフォーマンス)の準備 同じ目標に向かってグループが一つになった



キャンプ・ファイヤーで着る衣装を作ろう
Hard at work!



こんなのどう? いい感じ
お互いの距離がこんなに近くなりました



さあ、キャンプ・ファイヤーでの
パフォーマンスへ向けて作戦会議

Diary Thursday, August 23, 2001

Today, I made an under shirt.
It was very interesting.
I became Arabian.
Dinner was very delicious.
I like the best chicken.
Today was very fun 🙌🙌🙌

Wow, so you like eating chicken
the best, your clothes was very interesting,
today and you were very good, talking
more English, I was very happy 😊

Leader's Comment

Shun: You're doing good today! Thinking
of how to make cloth, and your English
is improving! Keep on trying! 🙌
Yeh, you look Arabian in that dress
Good work Today. Keep up Ed

Tom: Tawshi... You were excellent today
You smiled and danced 🙌

Day 8 8/24

湯布院青年の家へ みんなで作ったカレーはおいしかった そして、キャンプ・ファイヤーで、みんなの心が一つに！ 自信をつけた子どもたちが完全に主役になった



一番の思い出の一つがこれ
カレー作り



結構うまくできたじゃない みんなで食べると
おいしいね



今夜は僕たち、私たちが主役だ！ さあ始めるぞ！

4. 12日間の子どもの変化・成長ドキュメント

Day 9 8/25

より積極的に、前向きに！ バルーンのデザインも思いのままに、自由に、どんどん書き上げていった



ビッグバルーン
こんなの作るの初めてだね



Balloon Dance!



上がった！見て、見て、見てえ

Day 10 8/26

2回目の Free Time、Tシャツ作り

もう何だって、自分で決めて自分でやってしまう自己表現も自由にのびのび！



Going deep! よし! ホームランだ!



Teamwork!

思いのままに自由に表現「こんなのどう?」



どう、世界に一枚!

ボクのオリジナルTシャツだよ

Diary Sunday, August 26, 2001

Today I made T-shirt.

- .. At first we choosed pictures,
- Next, sticked pictures. After
- .. that we drew many words.

I drew "APU," "we are the BEST," "aya," "Group 3...". It was very interesting. Finised T-shirt was very GOOD! I was very happy. I want made T-shirt again. Today was interesting day!

Leader's Comment

Helen: WOW!! Great Work!! Maybe when you go back to Nagasaki, you can teach your friends how to print pictures on T-shirt.

Sumudu: One, look, its marvelous. Its great Super!! Its really great to have you in our group aya. You have improved so very much.

Elle: Excellent work I loved making the T-shirt. Too.

chun: Making T-shirt was more fun than making melodies I guess!! your T-shirt is so cute!! ^^

4. 12日間の子どもの変化・成長ドキュメント

Day 11 8/27

キャンプ・リーダーとの信頼関係の中で築きあげてきた自信、そして、やり遂げたという達成感を手にした



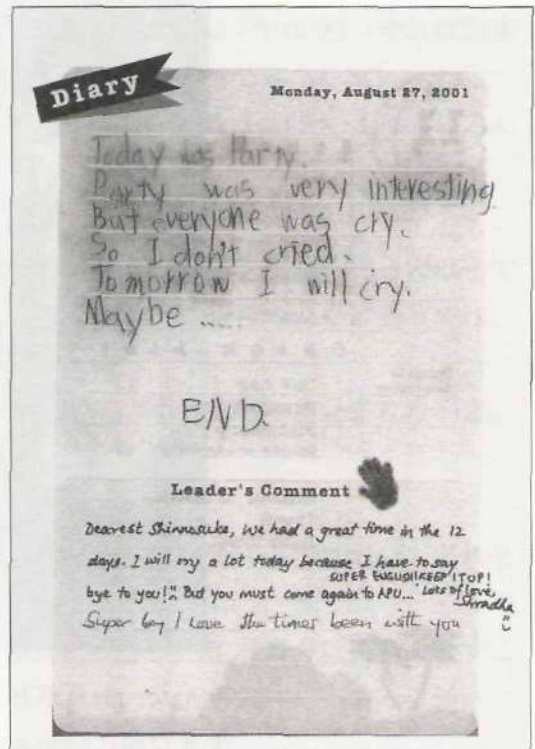
キャンプの感想を英語で堂々と発表
側で見守るキャンプ・リーダーの方が心配そう



パフォーマンスでポーズ! Hmmm...
もう何も怖くないよ。やればできるもんね



明日で最後だと思いと涙が・・・



Day 12 8/28

感謝の気持ちと大きな夢を胸に、新しい世界へ出発



卒業式で一人ずつ、スピーチ
Thank you Camp Leaders !
I'll never forget you !
みんな眩しいくらいに輝いてるよ



Camp Leader 全員が、子どもたち一人ひとりにエールを送ります



みんな、ありがとう！
大きな夢に向かって、頑張るよ！ また会おう！

5. コメント集



子どもたちの感想

IMMERSION CAMP was very very FUN! I don't forget it during my LIFETIME!!

私は最初、正確な英語で話せるか不安でしたが、文章の順番がばらばらでもキャンプ・リーダーは理解してくれました。キャンプ中は小さなことでもキャンプ・リーダーたちがほめてくれたり拍手してくれたことがうれしかったです。

12日目の卒業式でもみんな泣き出しました。私は、みんなと別れたくないし、キャンプも終わってほしくなかったです。キャンプが終わってから、イマージョンキャンプの夢を見ました。同じグループだったキャンプ・リーダーがキャンプが終わってエクアドルに帰っていったので、夏休みの自由研究はエクアドルのことについてインターネットを使って調べました。日本はエクアドルからたくさんバナナを輸入していることがわかりました。スーパーで買ったバナナについていたシールを見たら"ECUADOR"と書いてあったのでキャンプ・リーダーのことを思い出して、なぜかうれしかったです。(小4 K.S.)

CAMPの1日目、2日目、くらいまでは、ただ「Yes.No」とか、かんたんな言葉を話すことしかできませんでした。3日目になって、友達も出来て、少しは思っている事を英語で話せるようになりました。そして、この“Don't be afraid of making mistakes”という言葉が「大切だ!!」とわかりました。

日記とか作文も英語で書けるなんて、自分で出来るとは、思っていませんでしたが、毎日、少しずつ挑戦していくうちに“I can do it”という自信がついてきて、どんどん「ヤロウ」「やれば出来る!」と思いました。

リーダーは、みんなやさしくて、楽しくて、おもしろくて、とっても元気で、1つ、1つ、いろいろな事を、教えて下さいました。(小4 M.S.)

みんなとたくさん話をしたかったけど、やっぱり英語でぼくの思っていることを伝えるのはとてもむずかしくて、ちょっとくやしかった。もっともっと英語を勉強して今度みんなに会う時は、何でも英語で話せるようになりたいと思った。

みんなみんなありがとう。みんながいたからぼくがんばれた。みんなの事はぜったい忘れないよ。

(小4 H.N.)

ぼくは、この、English Immersion Camp 2001で、失敗をおそれずにチャレンジすれば、だれとだって話せる、なんでもできる、ということがわかりました。

このキャンプのおかげで、英語と親しくなれたし、外国の人との話しかた、「自分は英語を話すことができる」という自信もつきました。(小5 S.U.)

ぼくは、イングリッシュ、イマージョンキャンプにいったとおもしろかったです。なぜなら、いろんなおもしろい体験できたし、なにより外国の人とのコミュニケーションにすこし自信を持ったことです。前は、英語について、「どうせ、外国にりゅう学しないんだから、やんなくてもいいじゃん」と思っていたけど、今は反対に「日本一のほん訳家かつう訳になってやると思っています。(小5 Y.S.)

たくさん友だちができたし、キャンプ・リーダーと英語で話せたこともとってもうれしかったです。だって、“Don't be afraid of making mistakes. Let's try communicating in English” と何回も言われたからです。だから、「まちがってもいいんだ」と思って、いっぱい話しかけることができました。キャンプ・リーダーは、みんなとてもやさしくて、たくさんほめたりはげましたりしてくれました。(小5 M.H.)

このキャンプに参加する前は、ほとんど英語がしゃべれませんでした。しかし、リーダーさんやスタッフさん達のおかげで、まだまだかもしれませんが、自分なりに英語での会話が、聞きとることができ、知っている単語で表現できるようになりました。

たくさんイベント、行事をがんばってやってきましたが、英語だけでなく何事にも Let's try だと言うことも分かった気がします。

今回のキャンプは楽しむだけでなく、たくさん経験をしました。ぼくは、今まで以上にすべてのことで積極的に物事を考えて人のために役立てるようにがんばっていきたいと思います。これからも楽しみながら英語をがんばります。(小6 M.O.)

夕食の途中に、キャンプ・リーダーといっしょに今日あった事を振り返った。そしてその時、僕はまるでマジックにでもかけられた様にどんどんキャンプ・リーダーと英語で言葉を交わしていた。

僕はキャンプ・リーダーとの交流を通じて、英語に対する気持ちがすごく変わった様な気がする。この12日間で、僕は大きく変わった。来た時の恥ずかしさが嘘の様にふっ飛んでいた。12日間の英語だけの生活の中で、僕は英語という物がとても好きになれた様な気がする。これまでは「間違っていたらイヤだから喋らない」と言って英語で会話する事から逃れようとしていたけれど、このキャンプで英語がどれだけ解っていても心の中で思っているだけで、相手に自分の気持ちを伝えようとしなければ意味がない、表現する事が大切なんだというとても大きな事を学んだ。

(小6 H.K.)

キャンプから帰って、前から好きだった英語がもっともっと好きになりました。英語も日本語と同じように話せるようになりたいと思いました。これからは、今まで以上に英語を一生けんめい勉強していきたいです。今、私は Camp Leader に英語で e-mail や手紙を書こうと思っています。

(小6 R.M.)

5. コメント集

キャンプ・リーダーたちの積極的な行動力にとっても魅力を感じました。英語が話せることも大切ですがこれからの国際人はリーダーたちのような積極的な行動力こそが大切なんだということ学びました。(小6 R.E.)

前までは読もうと思わなかった英語の本も読んでみようという気になりました。声に出して読んでみたらキャンプ・リーダーたちと話しているみたいでとても楽しかったです。私は大人になったら通訳になりたいと思います。(小6 A.T.)

キャンプにいったから、とても楽しかったことはTシャツをつくったことです。そのTシャツには、キャンプの中でとった写真の中で自分が一番気に入った写真をTシャツにプリントしました。その写真がキャンプの中で一番仲良くなった友達と写した写真だったので、Best Friend! と書き入れました。

そのTシャツは、キャンプで、一番最後の日の卒業式の日に着ました。このTシャツは私にとっての一番の宝物になると思います。

キャンプが終わる少し前に、私は、キャンプ・リーダーに「いつかあなた達がもう少し大きくなったらオーストラリアに来て下さい」といわれました。その言葉を言われた後、「これから英語をがんばろう!」という気持ちになりました。もちろん私は、もう少し大きくなったらオーストラリアに行きたいと思います。(小6 A.S.)

遊びや日常生活で英語を使うことはけっして楽なことではなかったし、たくさん苦しみました。だけど、二日目、三日目・・・と日にちがたって行くうちにだんだん、すこしずつだけ英語を話すことになれて来て平気でキャンプ・リーダーさんたちと話することができるようになりました。

(小6 K.N.)

キャンプに参加して心に残ったことはTシャツ作りと楽器作り、外国の人とのコミュニケーションのこと、最初にあったとき、訳がわからなかった英語がずいぶんかわるようになったことです。キャンプにはいろいろな国から留学生がキャンプ・リーダーとして参加していて、世界は広いなあと実感しました。英語だけですぐすことがこんなにも大変だと思いませんでした。キャンプ・リーダーが説明していることが特に早くて訳がわかりませんでした。自分の持ったこともうまく話せなくてもどかしい思いをしました。でも、一生けん命話して通じたときはとてもうれしかったです。

もっと英語を勉強し、外国の人とも自由にはなせるようにがんばりたいです。(小6 S.Y.)

保護者の感想

キャンプ初日は笑顔で送り出したのに We Are The World の流れる卒業式会場でわが子の姿を見た途端、涙があふれてきました。たくましく成長し発言する時もしっかりと意見を述べる姿に驚かされました。当日は帰りの車の中でもそして自宅に帰ってからもずっと英語で会話しました。よほど楽しい毎日だったのでしょう。キャンプのことを思い返し、まだ帰りたくなかったと涙ぐむほどでした。12日間のチャレンジを通じて自信を深めますますやる気になったようです。この気持ちを忘れず勉強を続けてキャンプ・リーダーの皆さんのように今度は次世代の子どもたちを引っばっていけるようになってほしいと思います。(小4 M.S. 保護者)

今回のキャンプが子どもの心に深く刻まれ、これからの人生に大きな影響を与えてくれるものと思っています。子どもは、英語でなら世界の人々とコミュニケーションを取ることができるということを強く感じているようです。広い視野に立って物事を考えられる人に成長して行って欲しいと願っています。

イマージョンキャンプという貴重な体験、そして感動を与えてくださってありがとうございました。(小4 K.S. 保護者)

英語は勉強の1科目と思っていたのが、実際の生活で使ってみたことで、コミュニケーションの道具だと思えるようになったようです。「ゆっくり話してもらったら結構わかったよ」と言う言葉から、今まで学習を続けてきてよかったという自信が感じられました。不自由なくコミュニケーションをとれるためにはもっと勉強が必要だと思ったのでしょうか。今まで以上に前向きに取り組んでいます。(小4 Y.W. 保護者)

一生の思い出となるキャンプを体験させていただき、ありがとうございました。卒業式で、22名のキャンプ・リーダーの方々が壇上の子どもたち一人一人に涙とともに声をかけ、ギュッと方を抱いてお別れするシーンを目にし、この12日間に築かれた確かな心と心のつながりを感じずにはいられませんでした。いっばいの愛情を受け止めて帰りましたMはとても明るく、前向きになり、口数も増え、何か自信ができたように思います。(小5 M.H. 保護者)

大阪空港に迎えに行った時、大きな荷物を抱えて、キャンプの仲間たちと自慢のTシャツを着て帰って来た息子は少したのもしく感じられました。帰りの車の中では、キャンプがどんなに楽しかったかずーっとしゃべりっぱなしで弟や妹にも英語を一生懸命勉強して、必ず Immersion Camp に参加するよう話していました。

キャンプから帰って来て一番感じたのは“もう一度自分で考えてみる”と今までにならやり通せなかった事にチャレンジする力がついたことです。(小5 Y.T. 保護者)

5. コメント集

キャンプでは、言葉を聞きとり理解するのに苦労した様ですが、キャンプの卒業式に出席すると、スタッフ、リーダーと私との通訳も自信たっぷりにしてくれて、頼もしく思えました。自宅に戻ってから、英語を見近に感じられているのか覚えてきた日常会話も使っています。そして「英語の試験も受けてみようかな！」と意欲も見せてくれました。(小5 M.T. 保護者)

息子のこれまでの経験の中で、最大のピンチだったと思う。12日間家族と離れ、理解できない英語が飛び交う日々に耐えられるか。案の定、彼の話では、初日に見知らぬ外国人に寄って来られてビビッてしまったとか。

しかし、卒業式に出席し、外国人スタッフと打ち解けている彼を見て、今回の12日間は、いかに楽しい日々であったか、又、勉強の一教科としてではなく、生活の手段としての英語を経験した重要な期間だったと実感した。子どもの頃に、このような経験をする事は、彼の人生に大きなプラスとなったと思う。(小5 S.U. 保護者)

卒業式に参加して、想像をはるかに越える成果を目の前にし大変感動しました。17カ国のキャンプ・リーダーと公文のスタッフの方々、参加した30名の子ども達の涙、涙。一つの家族の様に感じました。英語を学んだだけでなく、もっともっと大切な一生の宝になるものを学んだ様に思います。「英語が好き」「夢は留学すること」と言ってCampから帰ってきました。今後、目標に向かって一步一步進んで欲しいと思います。(小6 A.S. 保護者)

参加生徒が通う公文式教室の指導者から

イマージョンキャンプ最終日の卒業式に参加しました。卒業式の壇上で泣いているS君や、他の子ども達、留学生のキャンプ・リーダー22名、スタッフの方々をみて、12日間の密度の濃さを肌で感じとれました。国籍こそ違いますが、どのキャンプ・リーダーも、子ども達をおもいきり抱きしめたり、抱きあげたり、握手をしたり、・・・スキンシップが見事でした。子ども達は、ひとりひとりが“自分は愛されている”と感じたそうです。人と人のコミュニケーションの原点を考えさせられました。(小4 S.N. 指導者)

イマージョンキャンプがよほど楽しかった様です。参加後、英語への興味、自信が一層深くなったと思います。特に驚いたのは、リーダーと毎日の出来事を、英語でメール交換している事です。今迄学習してきた英語が、使える英語へと高まっていく様子がはっきりと見えています。将来の夢へ一歩ずつ、近づいていく事を、とても嬉しく思っています。(小6 H.K. 指導者)

キャンプ・リーダー、スタッフの感想

子どもたちと過ごした12日間で、人生が変わったような気がします

S. C (INDIA)

初めてイマージョンキャンプのことを聞いたとき、12日間ずっと英語でコミュニケーションをとるなんてすごいと思いました。一緒に生活する中で普通に会話をするのが勉強になる。実際、教えるという感じではありませんでした。最初はただおしゃべりしていただけでしたが、子どもと話す中で、自分が話すだけでなく、子どもが何を考えているのか、何を伝えようとしているのかを今まで以上に考え、忍耐強く聴くようになりました。そして、子どもが理解しやすいように、より親切に、いねいに話すようになりました。子どもの世界に大人である自分がどこまで入っているのか、子どもたちの気持ちを考えながら行動した経験は、自分にとって大きな勉強になりました。キャンプ・リーダーたちは、大学や寮で一緒に友だちばかりでしたが、一つの目的のために力を合わせてこんなに頑張った経験は初めてでした。一緒にキャンプをすごして友だち関係も全く違うものになりました。

イマージョンキャンプが終わってみて、自分自身の感情に一番驚いています。これほど心が動かされるとは想像もしていませんでした。子どもたちが自分の子どもや弟・妹のように思えます。12日間で、国・世代を越えて、お互いが一人の人間として、こんなに人に近づくなんで・・・人生が変わったような気がします。すべての子どもたちが「来年も参加したい！」と言ってくれたことを、大変うれしく思っています。

子どもたちから教わったこと。Patience、Happy、そして、Never give up

P. J (NEPAL)

このキャンプで、子どもたちだけでなく私たちキャンプ・リーダーも多くのことを学びました。ひとつは、「Patience」、忍耐強さ・我慢すること。子どもたちはすぐにはできるようにはなりません。子どもたちができるようになるように私たち大人は手助けし、そして待つあげなければなりません。日々、Have more patienceであることを学びました。

ふたつめは、「Happy」子どもたちはいつもHappyです。自分がさみしい気分のときも子どもたちに会えば、Happyな気分になれます。そして、子どもたちもさらにHappyな気持ちになる、とても大切なことです。

そして、「Never give up」英語で思うようにコミュニケーションがとれなくても、子どもたちはいつも、Try speaking English。私は今、日本語を勉強していますが、日本語でコミュニケーションがとれないと、つい途中で投げ出しくなります。子どもたちにはそれがありません。Never give up, Keep tryingな姿に多くを学びました。12日間をいっしょに過ごし、お互いにheart、心が通じ合っていることを強く感じます。子どもたちが今、感じていることが伝わってくるし、私が感じていることも子どもたちに伝わっていました。世界はHeart to heartでつながっていることを体感できました。

イマージョンキャンプ名誉校長 国際ジャーナリスト／木下玲子

いちばん心に残ったこと——「Can I hug you ?」「Yes, please.」

キャンプ最終日前夜のパーティーで、子どもたちみんなが別れを惜しんで泣いていました。私は子どもたちに、「You are all right. You are OK.」と話しかけました。キャンプ当初、英語でフィジカリーに近づいていく私に、子どもたちは拒否反応を示していました。ところが最終日、泣いている子どもたちに同じように英語で話しかけても何も言わない。何も言わないどころか、「Can I hug you ? あなたのこと、ぎゅってしてもいい？」と言ったら、「Yes, please.」と返ってきたんです。

これが一番大きな変化だと思います。泣いている自分に「ハグしてもいい？」と言ってくれた人に、英語で「Yes, please.」そして私がハグしたら、ぎゅっと抱き返してくる。日本の子どもたちは、普段の生活の中で親以外の大人たちと心を開いたヒューマンタッチがあまり多くありません。それが、12日間の経験の中で、自分の殻を破って出てきて、「Yes, please.」と言えるようになった。これだけで、私は彼らの変化を感じました。

ふたつめの言葉を知ることで、人の気持ちがよりわかるようになる

英語でのコミュニケーションに挑戦することは、子どもたちにとって、決して楽しいことばかりではなかったと思います。ふたつめの言葉を知るには、たくさんの苦勞が伴います。その苦勞の中で、人の気持ちが今まで以上にわかるようになり、人のことを思えるようになります。また、ひとつの言葉だけの中にいると、その言葉のカルチャーにしばられてしましますが、ふたつめの言葉を知ることによって、今まで知らなかった自分のいい部分が出てくるようになります。「Can I hug you ?」「Yes, please.」はそのひとつであり、大きな変化だと思います。

イマージョンの経験は、大きなパワーになる

今回の子どもたちの変化は、ひとつは英語のおかげだし、もうひとつは、普段と全然違う環境で自分が周りの大人たちにすごく大事にされている、信頼されている、責任を持たされている、愛されているという感覚が子どもたちにじわじわと染み込んでいったからだと思います。12日間のイマージョン環境は、ごく限られた環境かもしれませんが、しかし、この一回の経験は子どもたちにとって、ものすごいパワーになるはずです。

私たち大人は、残念ながらイマージョンに参加した子どもたちと同じような経験をすることはできません。私たち大人の責任は、自分たちが経験できないからと、次世代の子どもたちに「あなたたちもムリよ」とは言わないこと。子どもたちに経験させてあげましょう。子どもたちからさらに次世代につながっていくかもしれないし、そこから生まれればいいと思っています。

このキャンプの感想は「すごいキャンプだったな」です。なにがすごいって？キャンプが成功するか、しないかの鍵を握るのはやはりキャンプ・リーダーのモチベーションがどこまで続くかにかかっていると思っていました。初めてのキャンプでの一番の不安はそこでしょう。しかしキャンプ・リーダーの毎日のミーティングでの真剣さに「こいつらすごいな」って思いました。

子ども達に対して英語で話しかけても、彼らはあまり反応してくれない。これはかなりきついことであるにも関わらず、彼らはどうすれば解決できるのかを真剣に議論していた。あのような光景は APU 内で私はまだ見たことがなかった。これが「異文化コミュニケーション」の一つの姿なのだろうと思いました。

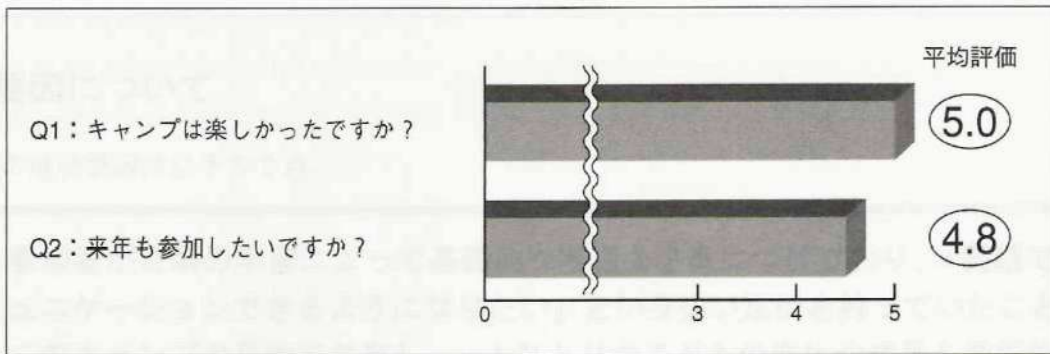
あのミーティングがなぜ成立したのか考えてみて、やはり対象が子どもということ、それと公文スタッフの方々はキャンプ・リーダーの視点で物事を進めていたからだと思います。そして共に苦労しながらもがんばってきた結果が最後のパーティー、卒業式での感動になった。久しぶりに鳥肌がびんびん立っていました。

異文化理解、異文化コミュニケーションが今後の社会で必要になってくるといわれていますが、本当に大事なことってなんなんでしょう？習慣、文化、歴史などの問題で国と国との関係はなかなか良くならない。でも子ども達が見てた視線はなんだと考えた時、そこにそんな問題は存在しない。同じ人間と人間とのコミュニケーション、関係だけが存在し、それを感じていた。私はここが一番大事なことだと思います。このキャンプの光景を各国のトップ達が見ればちょっとは世界もかわるんじゃないかなと思いますよ。現場にこそ物事の本質があると。

6. アンケートの結果から

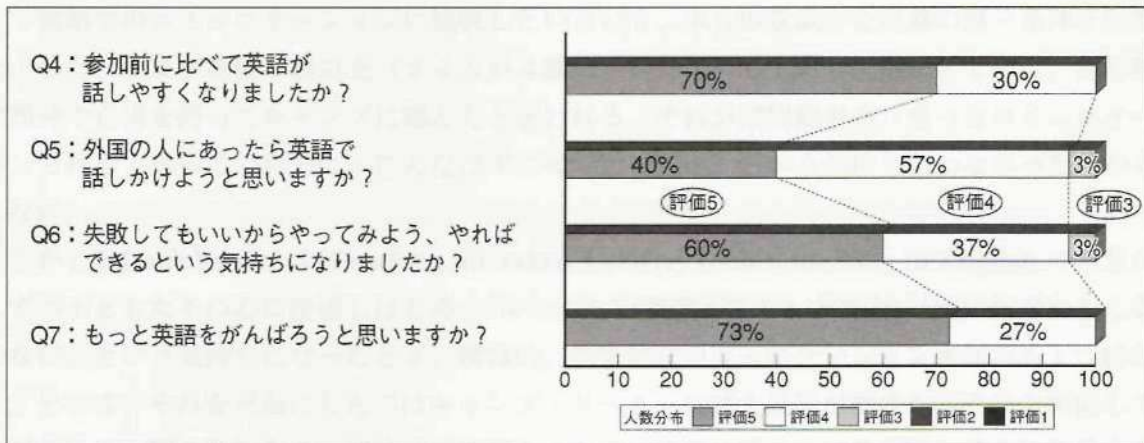
最終日、すべてのプログラムが終了したあとに日本語によるアンケートを実施した。5段階評価（5：大変そう思う 4：そう思う 3：ふつう 2：そう思わない 1：全く思わない）

評価は「5」「4」がほとんどであり、参加者の満足度の高さとともに、キャンプを通じて得た成果、自信や意欲がはっきりと読み取れる。



Q3：一番楽しかったアクティビティーは何ですか？

⇒数ある選択肢の中から、1位：Farewell Party、2位：キャンプ・リーダーとのおしゃべりであった。コミュニケーションそのものを楽しんだことが伺える。



Q4：参加前に比べて英語が話しやすくなりましたか？ [平均：4.7]

Q5：外国の人にあったら英語で話しかけてみようと思いますか？ [平均：4.4]

Q6：失敗してもいいからやってみよう、やればできるという気持ちになりましたか？

[平均：4.6]

Q7：もっと英語をがんばろうと思いますか？ [平均：4.7]

⇒参加前に比べて確実に自信は深まった。知らない外国の人に声をかけることにも挑戦してみたい。さらにコミュニケーションの手段として英語を使えるようになりたいという意欲の高まりが感じられる。

Q8 : キャンプ・リーダーはよくほめてくれましたか? [平均 : 4.7]

Q9 : 朝の学習タイムは集中できましたか? [平均 : 4.1]

Q10 : キャンプ・リーダーと一緒に学習してよかったですか? [平均 : 4.8]

⇒ キャンプ・リーダーはよくほめてくれた。そして、学習も一緒に頑張った仲間という意識が育ったようである。



7. 考察

このキャンプの目的・成果（以下の3点）については十分に達成されたと考える。

- 子どもたちが、いろいろな文化をもつ人たちとの交流を通じて驚き・感動を得る（その人の志や国や地域、文化、考え方を知り、世界の中の自分を感じる）
- 子どもたちが、英語を使ったコミュニケーションの成功体験を持つ
- 子どもたちが、世界への広い視野を持ち、自信・自己肯定感・意欲・やる気を持つ

成功要因について

今回の成功要因は以下の2点。

- 1 参加者が日頃の学習によって基礎的な英語力を身につけており、「英語でコミュニケーションできるようになりたい」という強い意欲を持っていたこと
- 2 このキャンプの目的を共有し、一人ひとりの子どもの変化や成長を徹底的に認めて、ほめて、元気づけたキャンプ・リーダーやスタッフたちの存在

<1について>

「英語でのコミュニケーションに挑戦したいという、本人の意欲」を応募の第一条件としていた。また、全員が英検5級以上（24人が4級以上）を保有しており、不安とともに、ある程度の期待や自信を持ってキャンプに臨んだと思われる。それが期間前半の「もっとコミュニケーションとれると思っていたのに…こんなはずじゃなかった…」という気持ちにつながったのかもしれない。

しかし、Don't be afraid of making mistakes. Let's try communicating in English.の言葉が少しずつ子どもたちの心に浸透しはじめ、「少しくらい間違っても大丈夫」「別に恥ずかしくなんかない」という気持ちになったとき、積極的、意欲的にコミュニケーションを試みるようになった。そして、それを可能にしたのはキャンプ・リーダーの話す英語が聴けた、それを真似して繰り返したり、聞き返したり、気持ちを表現するために自分の持っている英語知識を総動員することができたからである。すなわち、日々の学習を通じて培ってきた基礎的な英語力があったからに他ならない。

一般的に小学生は学校で英語を学習していないという現状において、今回の参加者はかなり「優秀」な子どもたちと映るかもしれない。しかし、日々コツコツと学習を続けることでこのレベルの実力をつけることは十分に可能であり、決して極端なケースではない。むしろ将来的にはこの程度の英語力を目指すべきではないかと考える。（※一例であるが、小学生の英検合格者は年々増加しており、2000年度、3～5級の合格者は63,161名に達している。）

<2について>

Don't be afraid of making mistakes. Let's try communicating in English. この言葉がいかにか子どもたちの支えになっていたかはキャンプ終了後の感想文からも伺える。それは、この言葉が胸に刻まれたのも、その言葉どおりに実践し、一人ひとりに対していつも親身になって働きかけたキャンプ・リーダーやスタッフがいたからに他ならない。

子どもたちが何かをするたびに、拍手が起こり、たくさんの誉め言葉が飛び交った。Fantastic! Excellent! Good Job! Very Good! Way To Go! Wonderful!・・・

徐々に英語でのコミュニケーションが進んでいったが、子どもたち同士になるとつい日本語になってしまう。そんなとき、あるキャンプ・リーダーがつぶやいた。「みんなが日本語で話すから、何が楽しくて笑っているのかわからない。寂しいよ。一緒に笑いたいんだ。お願いだから英語で話して・・・」この言葉で子どもたちは、キャンプ・リーダーも英語がわからない時の自分と同じ気持ちであることを知った。

「自分のためにこんなにも一生懸命に行動してくれる人がある」「自分は本当に愛されている」子どもたちがそう感じ始めたとき大きな変化があった。「今、目の前にいる、大切なこの人ともっと話したい」「自分の気持ちをもっと伝えたい、お互いもっと知り合いたい、分かり合いたい」ごく自然なコミュニケーションの始まりであった。

「沈黙期間」を乗り越えて…日本の子どもたちはやればできる!

グローバル化が急速に進む中、十分なコミュニケーションがとれるだけの英語力が不可欠である。しかしながら、多くの日本人は「いくら頑張っても英語はできるようにならない」というあきらめすら持っている。

しかし、今回 English Immersion Camp に参加した子どもたちは、「英語でコミュニケーションできた」という成功体験を持つことができた。日常的に英語を使う環境にはない中で、日頃からコツコツとそして意欲的に英語の学習を続けてきた彼らの成功体験は、同じような状況で努力を続けている他の多くの子どもたち、そして大人たちにも大きな自信と勇気を与えてくれる。

ほとんどの参加者にとって、今回のキャンプが英語をコミュニケーション手段とする生活への初めての挑戦であった。何を言われているのかわからない、何を言ったらいいのかわからないと途方にくれたり、通じなかったらどうしようという不安にかられ、自信がなくて、恥ずかしくて思うように表現できないというもどかしさや悔しさも経験した。もちろん、個人差はあったが、これくらいは聴けるだろう、話せるだろうと思っていた自信が打ち砕かれ、途中、英語を話せなかったり、話さなかったりする「沈黙期間」もあった。

しかし、キャンプ・リーダーたちの一人ひとりの子どもたちに対する献身的なサポートに触れ、お互いの信頼関係が構築される中で、英語でのコミュニケーションに対する抵抗も徐々に減っていった。「大丈夫、やっごらんと励ましてくれる」→「がんばったらできた。また、すごく誉めてくれる」→「うれしくてもっとやってみようと思う」そんな好循環の中で、「英語で、コミュニケーションできた」「やればできる」という成功体験を日々積み重ねていった。

7. 考察

12日間は長いようで短い。この短期間で英語力を格段に向上させることは困難であり、求めるべきことでもない。しかし、それぞれが持っている力を十分に引き出し、英語をコミュニケーションの手段として積極的に使おうとする姿勢を育むことは確実にできたと思う。

参加した子どもたちはそれぞれに、「失敗を恐れずに挑戦する力」「やればできるんだという自信や自己肯定感」を大きく膨らませた。さらに世界への視野を広げ、「もっともっと英語でコミュニケーションがとれるようになりたい」「将来の夢や希望をかなえるためにもっとがんばろう」という意欲を高めた。日本の子どもたちはやればできるのである。

おわりに

「なぜ、英語を勉強するの？」 この問いに対する答えはいくつかあると思います。

「21世紀、グローバル化がさらに加速する中、世界共通語である英語をコミュニケーション・ツールとして使える力は不可欠だから」というのもそのひとつでしょう。

しかし、キャンプに参加した子どもたちの答えは少し違っていると思います。「今、目の前にいるこのキャンプ・リーダー、自分のことを一生懸命に考え、こんなにも愛してくれるこの人ともっとコミュニケーションをとりたい。お互いにもっと分かり合いたいから」そんな答えが返ってくるような気がします。

子どもたちは、いろんな国の人たちが、英語という、たった一つの言葉で理解し合えるという現実を目の当たりにしました。世界や平和ということについて、これまで言葉や頭で理解していたものとは比べ物にならないほど強烈に感じたに違いありません。

あるキャンプ・リーダーは「よりよい明日を創るために、今日という日を懸命に生きることを、大人に、子どもに望みます。肌の色や文化や考え方などさまざまな違いがあっても、みんな同じ人間であり、仲間です。そのことは、直接に触れ合い、ぬくもりを感じ、会話を交わし合うほど強く感じることができます。さまざまな背景を持つ人たちが仲良く生きられるという可能性を世界に証明したい」と、このキャンプに対する想いを寄せてくれました。

また、参加した日本の子どもたちは終了後の感想文に「家族みたいになった！」「みんながいたからぼくはがんばれた。みんなのことをぼくは絶対に忘れないよ！」「これまでがんばって勉強してきた英語、さいしょは何言われているかわからなかったけど、さいごは通じました。うれしかったです！」「将来わたしがなりたいのは・・・」と素直な気持ちを綴ってくれています。真剣に子どもたちの未来を考え、国を思う、そんな気持ちの学生や大人のスタッフが、子どもたちに本気で接したからこそその感想ではないでしょうか。直接話し、身体で感じ、心が通じた感動は、子どもにも大人にも必ず大きな影響を及ぼすことができるのです。

もちろん、普段の生活では、毎日がこのような感動の連続というわけにはいかないでしょう。そして今、子どもたちにとって家庭や学校での「生活や教育」が「決まりごとや教えこみ」のようになっているのかもしれない。しかし、大人が本気になって「何のために」との想いを込め、子どもを一人の人間として尊重して接することで変えていける部分も大きいはず。そんな中でなら子どもは「経験や感動」を自分のものとして深く心に刻み、それを大切に生きていくことができるでしょう。

もちろん大人だって迷ってしまうことはたくさんあります。最初から完璧な人間はいません。しかし、大切なことは、大人も子どもも、積極的にコミュニケーションをとること、そしていろんな想いや考えをぶつけあい、お互いを高めあうことだと私たちはこのキャンプでも実感しました。

みんなが幸せに生きていく世の中を創ることは、この地球上に素晴らしい「人」が存在するかぎり可能だと確信します。

参考

参加者の内訳

イニシャル	学年	性別	都道府県	英検
S.N	4年	男	福岡県	4級
H.N	4年	男	三重県	3級
Y.W	4年	男	広島県	4級
Y.K	4年	女	大分県	5級
M.S	4年	女	大阪府	3級
K.S	4年	女	大分県	4級
M.S	4年	女	大分県	4級
C.N	4年	女	大阪府	3級
S.I	5年	男	愛媛県	4級
S.U	5年	男	熊本県	4級
Y.S	5年	男	石川県	4級
Y.T	5年	男	京都府	5級
S.I	5年	女	熊本県	4級
M.T	5年	女	三重県	5級
M.H	5年	女	岡山県	3級

イニシャル	学年	性別	都道府県	英検
M.Y	5年	女	広島県	5級
M.O	6年	男	岡山県	5級
H.K	6年	男	石川県	3級
S.K	6年	男	愛媛県	4級
N.K	6年	男	奈良県	4級
T.S	6年	男	熊本県	4級
H.T	6年	男	滋賀県	3級
K.N	6年	男	三重県	4級
S.Y	6年	男	愛知県	5級
N.A	6年	女	岐阜県	4級
R.E	6年	女	山口県	4級
A.S	6年	女	長崎県	4級
A.T	6年	女	富山県	3級
A.N	6年	女	長崎県	3級
R.M	6年	女	兵庫県	4級

英検資格：全員が5級以上を保有

学年	5級	4級	3級	総計
4年	1	4	3	8
5年	3	4	1	8
6年	2	8	4	14
総計	6	16	8	30

キャンプ・リーダーの内訳

出身国	人数	性別
インド	1	女
インドネシア	1	男
エクアドル	1	女
オーストラリア	1	男
ガーナ	1	男
カナダ	1	女
韓国	1	女
サモア	2	女・女
シンガポール	2	男・女

出身国	人数	性別
スリランカ	2	男・女
タイ	2	女・女
トンガ	1	男
ニュージーランド	2	男・女
ネパール	1	男
フィリピン	1	女
ブルガリア	1	女
ロシア	1	女

アンケートの集計結果

5段階評価

5：大変そう思う 4：そう思う 3：ふつう 2：そう思わない 1：全く思わない

	5	4	3	2	1	平均
Q1：キャンプは楽しかったですか？	30					5.0
Q2：来年も参加したいですか？	24	6				4.8
Q4：参加前に比べて英語が話しやすくなりましたか？	21	9				4.7
Q5：外国の人にあったら英語で話しかけてみようと思いますか？	12	17	1			4.4
Q6：失敗してもいいからやってみよう、やればできると いう気持ちになりましたか？	18	11	1			4.6
Q7：もっと英語をがんばろうと思いますか？	22	8				4.7
Q8：キャンプ・リーダーはよくほめてくれましたか？	21	9				4.7
Q9：朝の学習タイムは集中できましたか？	11	12	5	1		4.1
Q10：キャンプ・リーダーと一緒に学習してよかったですか？	25	5				4.8

Q3:一番楽しかったアクティビティーは何ですか？(人) [複数回答可]

1位	FAREWELL PARTY	18
2位	キャンプ・リーダーとおしゃべり	9
3位	野外炊飯カレー作り	8
4位	SPORTS	7
	キャンプファイヤー	7
6位	COMPUTER	5
	Tシャツ作り	5
	地獄めぐり	5

A P U 立命館アジア太平洋大学について

2000年4月に開校。建学の精神となる理念は「自由・平和・ヒューマニズム」。政治、経済、経営、地域社会などの諸分野において「アジア太平洋の未来創造」のために貢献できる人材を育成することを掲げている。最大の特長は、アジアを中心に世界60以上の国と地域から集まった国際学生が約2000名の学生の約半数を占めるという点。教員スタッフも半数は外国籍。さまざまな文化的背景を持つ学生同士が、英語を共通語として活用し、お互いに言語や文化を学びあっている。まさに、ミニ地球と呼ぶにふさわしい環境である。

英語基本指導マニュアル（日本語版）

（１）英語教育上の目的

このイングリッシュ・イマージョン・キャンプは、子どもたちに英語を実際に使う体験をさせること、英語でコミュニケーションができたという成功体験を持たせることを目的にしている。

「成功」というのは、正しい英語で正確に話せたということではなく、どんなかたちにせよ、コミュニケーションを試み、何かをなし得たということである。英語で言ったら伝わらなかったので身振り手振りでなんとか意思を伝えることができた、ということでも十分なのだ。我々は子どもたちが何とか通じさせようとする姿勢が最も大切だと考えている。そして、伝わらないことも含めて、英語を使った様々な体験を重ねることに価値があると考えている。

このキャンプのもう一つの目的は、様々な異なる文化をもつ人々——つまりあなたたち！と直接に触れ合うことである。日常の細かいことから考え方まで、様々な面での“違い”があることを知り、その違いを前提としながら互いに尊敬し合い、協働して何かを成し遂げること。そのためのコミュニケーションの大切さを体験的に知ること、これこそ子どもたちが将来グローバルな視野をもって地球社会に貢献できる人材となるためのかけがえのない財産となると確信している。

注意すべきことは、キャンプの全日程を通じて、子どもたちに、何かを成し遂げたという達成感をもたせることである。自己能力感、自己肯定感が他者への共感と尊敬を育む。英語がどのくらい有効に使えたかということとは別に、英語を使って異なる文化をもつ人々と交流することが好きになり、自分自身にもプラスのイメージをもてること——これを参加するすべての子どもたちに実現しよう。

（２）基本姿勢

- ・子どもたち一人ひとりを一人の人間と認め、本気で友だちになってください。
- ・子どもたちの名前を呼び、目を見て話すようにしましょう。その子があなたの言いたいことをどのくらい理解しているかを常に意識してください。
- ・できるだけことば（英語）をたくさん話してください。身振りで示せばわかることも、必ずことばをそえて、ことばで伝えるように心がけましょう。
- ・逆に、身振りや物を見せたり、理解の補助になるものはどんどん使いながら話しましょう。各アクティビティには、使えるものがいくつか用意されています。
- ・クラスルーム・イングリッシュのような決まった表現を意識的に多く使いましょう。これらははじめに子どもたちに練習させておきますので、理解を促進するのにたいへん有効です。（下記（３）②のリストに目を通しておいてください）
- ・子どもたちをたくさんほめてください。特に英語で話したとき、話そうとしたときに、最後までうまく言えなかったときですら、勇気付け、ほめることが大切です。
- ・子どもたちの発話の誤りを指摘したり訂正しないようにします。まず英語で話そうとした姿勢を認めその上で正しい表現で言い直しましょう。

例) 料理の場面で

"Tomato, cut..... I want.. cut.... tomato....."

"Oh, great! You want to cut these tomatoes? You can cut tomatoes! OK!...."

ただし、同じ単純な間違いを繰り返す子には、教えてあげることも効果的です。

- ・子どもの理解度を知るために、常に様々な方法で働きかけてみましょう。「わかる?」「OK?」「わからない人?」「〇〇(名前)は?(大丈夫?)」
- ・話さない子に発話を強要することだけは絶対に避けてください。たとえ1語の返事だけでも、です。子どもたちが、はじめて外国語の環境に置かれた場合、全く話さない時期(Silent Period)があり、長い場合は3ヶ月から6ヶ月にもなることが証明されています。そして、この時期に発話を強要すると大きな精神的なダメージを受けることもあるとも言われています。話さない子は、目を見て了解していることがわかったら、そのまま先に進みましょう。決して無視せず、うなずいたり、「OK」と言ったりしてこちらがその子のことを認めていることを示してから。
- ・少し難しいことの場合は、2人のリーダーでやってみせるなど、お手本を見せます。できない子に対しては、途中まで一緒にやり、最後に一人でやらせるようにしましょう。キャンプのすべてのプログラムを通じて、うまくできることではなく、TRYすること、下手でも最後までやりきることが大切です。

(3) 英語の使い方

●生徒が理解しやすいように、以下のポイントに注意して話してください。

1. 短い文で話す。文法的に正しい文が望ましいが、あくまで「自然に」を原則に。
2. 常に、抽象的な単語でなく、より具体的でbasicな単語を選んで使う。
3. ややゆっくり話す。生徒が理解しているかどうかによって、速さを変えるようにします。
(どんな場合でも不自然なほどゆっくり話す、というわけではありません)
※できるだけ多くの人にわかりやすい発音・アクセント・イントネーションを心がけてください。英米風である必要はありませんが、自分の発音の傾向を意識しておくことは有効です。
4. 重要なことや、子どもたちがわかっていない様子ときは、繰り返す。
5. 別の単語や表現で言い換えることも常に心がけてください。また、話のまとめを行うことも。
6. 話の途中や、最後に子どもたちが理解しているかどうかの確認を入れるようにする。
7. 注意をひくために、子どもの名前を呼ぶ。(話の前後や途中にも)
8. 「いま、ここ」"Here and Now"でのことはわかりやすい。できるだけ「いま・ここ」の話をしよう。「いま・ここ」でない話の場合は、理解をたすけるもの(絵や写真とか)をできるだけ活用しよう。
9. アクティティのはじめに説明するときなどは、カギになることばや概念を紹介しておきます。(キーワードは、各アクティビティの手順に記載してあります)
10. 日本語は一切つかいません。あなたが日本語ができる場合、子どもが日本語で話しかけてきたら、それを理解してあげて英語で言い換えたり、答えたりしてあげましょう。日本語がわからない時は、英語で質問するようにたすけてあげてもかまいませんが、強制的に言わせることにならないように気をつけましょう。とにかく、英語で言えないために子どもがあなたに話すのを放棄してしまわないように、常に励まし補助してやるのが大切です。

このようなバイリンガル教育やイマージョン教育に興味のある方のための参考文献

Colin Baker, *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism* 1993

Snow, M.A. *Foreign Language Education :Issues&Strategies* 1990

English Immersion Camp 2001 Report

21世紀を担う日本の子どもたちに、
コミュニケーション・ツールとしての英語力を！

編集・発行 公文教育研究会 Immersion Camp事務局
〒530-0001 大阪市北区梅田1-2-2
大阪駅前第2ビル9F
TEL：06-4797-8777 FAX：06-4797-8785
発行年月 © 2001年11月

公文教育研究会
Immersion Camp 事務局

